

# 原爆市長

ヒロシマとともに二十年



# 原爆市長

ヒロシマとともに二十年

濱井信三



日  
聞  
社

---

原 爆 市 長

定価 420円

昭和42年12月15日 第1刷発行

著 者 浜 井 信 三

発行者 大 田 信 男

印刷者 凸版印刷株式会社

発行所 東京・名古屋 朝日新聞社  
大阪・北九州

---

©1967年 浜井信三

## まえがき

これは、原爆以後の広島市政についての私の手記の一部である。

原爆が広島に投下されたときは、私は戦時生活部という部局の一課長にすぎなかったが、戦後間もなく広島市助役を命ぜられ、昭和二十二年四月の市長公選以後は、市長として、中一期を除いて四期十六年間、市政を担当した。従って私は、戦後の広島市の事情については、ある程度権威をもって語ることのできる人間の一人であることを、私自身も認めている。それに、戦前からいっしょに机を並べて仕事をして来た同僚や、原爆当時の市の幹部も、今ではほとんどの人が世を去ったので、適当な時機を見て、私が直接関係した事件だけでも一応整理して纏めておきたい、というのが私の念願の一つであった。もつとも、これまでも新聞や雑誌やラジオなどを通じて、断片的には、それらの一部を発表した。ところが、その都度、多くの人びとから、それらの話を一冊の本にして刊行してもらいたいという要望が相次ぎ、最近では、外国の人たちからも、同じような要請がつきつきと寄せられている。

本ということになると、私が計画していた記録の整理とは多少異質な仕事になるが、たまたま朝日新聞社出版局からの強い勧めもあって、とにかく戦後、私が直接関係したさまざまな事件の中から、

主なものを拾って、回顧録風に駄文をつづってみることにした。これが果して、読者の期待にそえるものかどうかを恐れるが、この拙文によって、いったんは死の町と化した広島市が、どのような経路をたどって回生したか、その間、広島市民がどのような困苦に耐えたか、またどんな気持で、広島市民が平和を強く叫びつづけているか、——等々について、その一端でも知っていただければ、著者として望外の幸せである。

なお、本書の出版にあたっては、朝日新聞社の元広島支局員吉永康平氏にいろいろとお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。

昭和四十二年十一月一日

著 者

目

次

まえがき

## 第一章 昏迷のなかで

|             |    |
|-------------|----|
| 午前八時十五分     | 一  |
| 無我夢中の幾日     | 三  |
| せめてもの一張羅    | 九  |
| 終戦前後        | 二七 |
| 原子病誕生       | 四〇 |
| 勧められて助役に    | 四七 |
| 百メートル道路     | 五一 |
| 復興財源に悩む     | 六〇 |
| “生活”のない市民生活 | 七〇 |
| 原子野往来       | 七八 |
| 浜井市政の発足     | 八五 |
|             | 九三 |

## 第二章 「平和都市」宣言

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 平和へ——「広島的心」     | 101 |
| 天皇陛下を迎える        | 115 |
| 海を越えて救援の手       | 133 |
| A B C C         | 139 |
| 「平和都市」宣言        | 137 |
| 「広島平和記念都市建設法」成る | 139 |
| 二つの大きな礎石        | 155 |
| 原爆資料館と長岡省吾氏     | 160 |
| 軍政部と丁丁発止!       | 164 |
| 忘れ得ぬ面影          | 182 |
| M R A 世界大会へ     | 192 |
| 「過ちは繰返しません」     | 204 |
| 第二期の市長選挙        | 211 |
| 明るい建設           | 229 |
| アメリカ借金旅行        | 230 |

### 第三章

#### いばらの道に花開く

.....二四七

#### 「原爆体験記」の蒐集

.....二四九

#### 原爆障害者の救済へ

.....二六一

#### 広島と原水爆禁止運動

.....二六六

#### 落選市長の記

.....二七六

#### 再検討で再発足

.....二八四

#### 加速度の発展に憶う

.....二八八

#### 都市施設の整備と大掃除

.....二九三

#### 戦争の発端と終点

.....二九八

#### 世界を股に“平和行脚”

.....三〇一

#### 「原爆ドーム」の永久保存

.....三〇九

#### 広島市原爆被災地図

# 第一章 混迷のなかで



## 午前八時十五分

### ◇ 白い閃光

朝から暑い日であった。

太陽はだいぶん高く昇っているようであったが、私は何となく頭が重かったので、じっと汗ばんだ肌を感じながらも、まだ床の上でうとうととしていた。前夜は二度も空襲警報が発令され、そのたびに私は市役所の防空本部へ駆けつけた。結局はなにごともなく、警報が解除され、家に帰って床に就いたのは明け方の四時ごろであった。このようなときには、敵の神経戦術にかからないように、防空本部員は、翌日の朝はゆっくり休んでから出勤していいことになっていた。

夢うつつであった。家族たちの話し声を聞くとともに聞いているうちに、突然、庭にいた義姉が、「Bさんが何か落とした、落とした！」

と叫んでいるのが聞えた。米軍爆撃機B 29のことを、広島市民はBさんと呼んでいたのである。ハッとわれにかえった私は、ガバととび起きた。その瞬間、ピカッと目がくらむような強烈な白い閃光であった。

私は反射的に再び疊に身を伏せた。つづいてドーンという、家が壊れるような音がして、いろんなものがバラバラ私のからだの上に降って来た。

しばらくして、あたりが静かになったので、起きあがってみると、家のようすが一変している。西側の壁が窓もろとも吹っとんで何も無い。天井は私の丈の高さあたりにぶらさがっているし、屋根も大半はけし飛んでしまつて、青空が見える。部屋中、いろんなものが散乱して、足の踏み場もない。

これが人類の頭上に初めて投下された原子爆弾なのだが、そんなものをそのとき想像したものは誰もいなかった。

爆風は一方的に西から来た。私は即座に、爆弾と焼夷弾とを混合したような新型の爆弾が、家の近くに落ちたと思つた。そんなものがあつたかどうか知らないが、強烈に光つたのに爆発音がほとんど聞えなかつたし、単なる焼夷弾にしては破壊力が大きすぎる。どちらにしても、これはいままでとは違つた爆弾だぞ、と思つた。

私は当時、市の配給課長で同時に防空本部の配給班長であつた。防空本部の内規では、市内のどこかに被害を受けたら、本部員は直ちに本部に集合して行動を起すことになっていた。私は家の始末を家族にまかせて、身支度もそこそこに家を出た。外へとび出してみると、東隣りの家の藁屋根から白い煙が上がっている。隣組の人たちが出てその消火につとめていた。

私の家は仁保町の山城屋にあつた。毎日市役所へ通うのに、自転車で皆実新開の畑の中を抜け、比

治山橋へ出るのであるが、この日は倒れた家や塀、こわれたものが散乱して道を塞いでいて、自転車は使えないし、他に乗物もないので、歩く以外に方法がない。途中、畑の中の肥壺の小屋も燃えていた。ちょっと変だなとは思ったが、別に深くも考えず、ひたすら道を急いだ。

◇ 火の海を市役所へ

比治山橋の近くまで来ると、たくさんの群衆が、あわてふためいてこちらへ向かって走って来るのに出会った。この人たちは、私を見ると、私がやって来た方を指さして、「あっちには火事は起っていませんか？」とか、「医者がいるところはどのあたりですか？」などとせっかちに聞くが、私の返事を待たずに、あたふたと走り去って行くのであった。まるで何ものかに追われているようであった。

その人たちは、まるで地獄からとび出して来たような姿であった。ほとんどが半裸体で、頭から血を浴びて真っ赤になっている。ポロ切れをぶらさげているかと思えば、それは腕や手先の皮がペロリとむけてぶらさがっているのである。

そのような、無残な姿の人の群れが、次から次へと逃げてくるのである。彼らは誰もが、自分の家に直撃弾が落ちたと口ばしっている。

一体、これはどうしたことなのか。気がついてみると、町の中へ向かっているものは、私のほかには一人もいなかった。

この人たちの姿を見て、私は、「これは大へんだ」と改めて考えた。とにかく市役所へ——と、い

つのまにか私は小走りに走り出してた。

比治山橋を渡ると、市役所まで道は一直線である。このあたりには、もう人の子一人歩いていない。道の両側で、家は軒ごとに崩れていたが、まだ火の手はあがっていないくて、白い煙が立っていた。

進徳女学校のそばまで行つたが、それからさきは火の海で進めない。しかし、ここまで来れば市役所は目と鼻の先である。水をかぶつてくぐり抜ければ行けないことはないと判断した私は、路傍の防火水槽に、背中の防空頭巾をザブリとつけて、かぶったとたん、うしろを振り返ると、さっき通つて来たとき白い煙をあげていた道の両側の家並みが、火に包まれている。

火災の挟み撃ちである。マゴマゴしていると、火の中から抜けられなくなる、——そう思った私は、いま来た道をまっしぐらに引き返した。川下の御幸橋を渡つて電車通りから市役所へ入ろうと考えた。比治山橋まで引き返して来ると、橋のもとに、懇意にしていた小金寿司のおやじさんの浪岡君が、自転車を小脇にかかえて立っていた。

私は彼の顔を見るなり、

「浪岡君、私は急いで市役所へ行かねばならないのだ。すまんが、その自転車のうしろに乗つけて、ひとつ走り走ってくれんか」

と頼んだ。

「よおがす、行きましょう。さあ乗って下さい」

さすがは江戸っ子だ。威勢よくそういうと、私を荷台に乗せて走りだした。ものの二、三百メートルも走ったと思ったら、荷台がゴツゴツ尻に響きだした。タイヤがパンクしたのである。パンクするはずである。気がついてみると、道は一面にガラスの破片や釘のついた木片、針金だらけである。私たちの自転車は、ガタガタとそのまま突っ走って御幸橋まで来た。

「ありがとう、もうここまででいい。この先は歩こう」

浪岡君と別れて私は歩きだした。電鉄本社の前まで来ると、顔から下血だらけになった人がこちらへ逃げて来る。近づいてみると、黒瀬収入役であった。収入役は私を見るなり、

「配給課長さん、どこへ行く」

と、あわただしくたずねる。私が、

「ひどい血だ、大丈夫ですか。私はこれから防空本部へ行くところです」

という、収入役は、

「ダメ、ダメ。役所はもう火の海だッ。誰もいない。危ないから行っちゃいけない!」

と、血だらけの手を振って、懸命に私を引きとめた。収入役の傷は、ガラスの破片を顔や手足に受けた程度で、見かけほど重傷ではなかった。

私はここで収入役から初めて市役所のようなすを聞くことができた。

そうしている私たちのところへ、自転車を引きずって中原考査役がやって来た。またしばらくすると、頬冠りして長い杖をついた浴衣の男が近づいて来た。森下助役であった。

黒瀬収入役の話では、この朝、市の幹部は、谷山戦時生活部長のほかは、まだほとんど誰も役所に出ていなかった。ので、防空本部としての活動も全然していないということであつた。被災の重大な実感が胸に迫つた。そこで私は、

「市中がこんな状態になっているのに、本部の所在もわからないようでは、市民は途方にくれる。こうして助役と考查役と収入役がいれば、市の幹部は一応そろつてゐる。幸い職業紹介所が焼け残つてゐるので、とりあえずその一室でも使つて、そこを広島市防空本部に定めましょう。あなた方は三人ともそこを動かさないで下さい。そして直ぐさま「防空本部」と書いてはり出しておいて下さい。私はこれから食糧の手配をしてきます」

と、一気にそう提案した。

すると、森下助役と黒瀬収入役が口をそろえて、

「人手の少ないときだから、君もいかないでもらいたい」という。

「いや、そうしてはいられません。市民はさつそく食糧に困るでしょう」

私は素晴らしいおいてその場を離れた。足がヒリヒリ痛んだ。どこでこしらえたのか、数カ所に引つ掻き傷ができていた。靴ずれの傷も痛んだ。